

ポソコツ淫魔は私を孕ませたい

夜果堂書房／高瀬ザクロ

## 第一話

「えっと……これで合ってるのかな」

浜崎ミリアは机の上に広げた古びた分厚い本をじっと見つめた。

ページは茶色に変色し、端は触れただけで崩れそうに脆い。

表紙に刻まれたタイトルは——『愛欲契約の魔導書』。

「……あいよく？　けいやく？　ほんと意味わかんないんだけど」

冗談みたいな題名に思わず苦笑する。

だが中身はやけに難解な呪文や古代文字ばかりだった。

（なんでこんな怪しい本、読んじやってるんだろ……）

ミリアの周囲には女子しかない。

バイト先の花屋も女子だらけ、通う学校も女子高。

だから恋バナを振られても、笑ってごまかすしかなかった。

（年齢Ⅱ彼氏いない歴。もちろんキスも未経験）

その事実を思うだけで、頬がじんわり熱を帯びる。

「やば……ほんとに。このまま一生、干物女で終わるのかな」

夜、ベッドの中でそうつぶやくたび、胸がぎゅっと苦しくなった。

SMSで流れてくる幸せそうなカップルも、見ないようにしている。

そんなとき——駅前の古本屋でこの本と目が合ったのだ。

ワゴンに山積みにした中、ひととき異質な存在感を放っていた。

革の表紙はひび割れ、背には金文字で“魔導書”の四文字。

「怪しさ満点……ていうか、厨二病っぽ」

値段はたった三百円。

「……まあ、ネタになるでしょ。インスタに載せたら笑えるし」

——こうして今、机に『愛欲契約の魔導書』を広げている。

ミリアはページを押さえ、声に出して読み上げてみた。

「えっと……“花嫁は夜の帳のもと契約の印を描け”……はあ？」  
思わず顔をしかめる。

「なにそれ。花嫁？ 私、相手いないんですけど……」

次の行に目を落とす。

“悦楽を知らぬ者こそ、真なる召喚者となる”……って、なに

その処女限定キャンペーン！」

バカバカしいと思うながらも、ついページをめくってしまう。端には円や三角を組み合わせた図形が印刷されていた。

「この印を床に描け。描いたのち契約を結べ”。はいはい」  
ノートの切れ端と転がっていたマーカーを手に取る。

「魔法陣っていうか、ただの幾何学模様じゃん」  
ブツブツ言いながら床にしゃがみこみ、書き写していく。

「さすれば、深き闇より導きの声が現れん”……って、RPG？」  
最後の一笔を描き終えた瞬間――。

マーカーの先がピクリと震え、インクが勝手に走り出した。

「えっ……ちょ、なにこれ……？」

描いた線が赤い光を帯びて浮かび上がっていく。

空気がずんと重く沈み、背筋に冷たいものが走った。

ロウソクの炎がぶわっと大きく揺れ、部屋に濃い影が広がる。

「わ、我が名は……サルヴァ……どっ……サルヴァド！愛と快楽を司る偉大なる淫魔なり！」

濃い煙を突き破り、黒いマントを羽織った巨大な影が現れた。

長い銀髪、隆々とした筋肉、ねじれた角。

天井に届きそうな長身に、青い瞳がぎらりと光る。

「ひっ……！ な、なにこれ……っ！ でっ……出たああ！」

腰を抜かして床にへたり込み、壁に背を押しつける。

「ふっ……恐れおのの——ぐわっ！」

サルヴァドは大仰に腕を広げた拍子に、マントの裾を踏んで派手によろけた。

床に杖を突き立て、なんとか体勢を立て直す。

煙の中からプシューと間抜けな音が響いた。

「……今の音……炭酸？」

恐怖は一瞬にして揺らぎ、違和感に笑いがこみ上げる。

「お、恐れおののけ！ 人間の娘よ！」

重低音を張り上げるサルヴァド——しかし次の瞬間、煙を吸い込んだのか激しく咳き込んだ。

「ゴホッ！ ゲホッ……！」

ミリアは目の前の“ポンコツ淫魔”に恐怖より先に笑いが溢れた。

「…………ぷっ…………ふふっ…………」

「な、なんだその笑いは！」

「だって、サルヴァドって…………サル？ 猿じゃん！」

顔を真っ赤にしたサルヴァドが、胸元をがしっとはだける。

「ふぎけるな！ 俺は淫魔だ！ 人間の女を孕ませ、その魂を！」

「はいはい、エロ猿ね」

「ぐっ…………！」

プライドを砕かれたサルヴァドは膝から崩れ落ちた。

だが次の瞬間、ぎらりと目を光らせ、ミリアに迫る。

「しかし…………契約は成立した。お前の身体は俺のものだ」

「は？ ちょ、ちよっと待って！」

気づけばベッドに押し倒されていた。

青い瞳は妖しく光り、吐きかけられる熱い息が頬をかすめただけで、背筋がぞわりと粟立つ。

「俺の使命はただひとつ——お前を孕ませることだ！」

「ま、待って！　いきなりそんな！」

必死に押し返しても、手首を軽く掴まれるだけで鉄の鎖のように動けなくなる。人間とは違う、淫魔の異様な力。

「ほら、身体はもう熱いぞ」

「ち、違うってば！　怖いだけ！」

胸の上をなぞる長い指先にぴくつと反応してしまう。薄布越しに乳房の柔らかさを確かめるように滑る指。

「んっ……！」

喉から息が洩れ、顔が一気に熱を帯びる。

サルヴァドの口元がにやりと吊り上がった。

「なるほど……ここが弱点か」

「ち、違っ……くすぐったいだけっ！」

必死に否定しても、サルヴァドの手は止まらない。

裾を容赦なくずり上げられ、形の良い胸があらわになる。

空気に触れた途端、先端が硬さを増し、じわりと疼きを訴える。

「やっぱり人間の乳は柔らかいな……指が沈む」

「ちよ、やだ……そんな言い方……！」

大きな掌に揉みしだかれ、乳首は硬く尖り、頭が真っ白になる。

「く……っ」

サルヴァドは舌なめずりして顔を近づけた。

「ちょ、ストップ！」

ミリアは反射的に枕を掴み、全力でサルヴァドの顔に押し付けた。

「んぐっ！」

そのままバランスを崩し、ドサツと床に落ちる。

「……こ、これ以上したら通報だからね！」

「うぐぐ……召喚者に床へ叩き落とされる淫魔とは……」

涙目でうずくまるサルヴァド。

ミリアは胸を押さえ、荒い呼吸を整えながら呆然とつぶやく。

「……ちよっと待ってよ。あんなわけのわからない本に書いて

あった、わけのわからないまじない……淫魔が出てくるなんて」  
ベッドの下でうずくまるサルヴァドをにらみつける。

「……てか、どういことなのよ？」

「な、なにがだ」

「いや、なにがじゃなくて！ 呼んだのは私だけど……！ なんていきなり“孕ませる”とか言い出すの……普通は願いを叶えるとかそういうのじゃないの……」

必死に叫ぶミリアに、サルヴァドは胸を張って言い返そうとしたが、すぐに齒切れ悪く視線を逸らした。

「……それは……我ら淫魔に課せられた宿命だからだ」

「宿命？」

「そうだ。我らは召喚者と“愛欲契約”を交わし、その肉体に命の種を宿さねばならん。そうしなければ……我が肉体は霧散し、この世から消えてしまう」

「えっ……」

数秒遅れて、言葉の意味を飲み込む。

「つまり、私を孕ませないとアンタ……消えちゃうってこと？」

「滅びる、だな。淫魔は死なぬ。ただ……形を保てなくなる」

淡々とした声の奥に、かすかな焦りが滲んでいた。

——命がけで迫ってきた理由をようやく理解する。

「バカじゃないの？ そんな大事なことを最初に説明しなさいよ！」

「し、しただろう！ 『俺の使命はただひとつ、お前を孕ませる

ことだ!』と!」

「それは説明じゃなくて、ただの変態セリフよ!」

ミリアの怒鳴り声に、サルヴァドはぐぬぬ……と口をつぐんだ。  
だがすぐに胸を張り直し、妙に誇らしげに言い放つ。

「……とにかく! 契約は成立してしまった。お前を抱かなければ俺は消える。だから——」

「だからって押し倒すな、このエロ淫魔!」

再び枕を投げつけられ、サルヴァドは情けない声をあげて床に転がった。

——こうして、“ポンコツ淫魔”と女子高生の不思議な同居生活が幕を開けたのだった。

## 第二話

「ふふふ……今日は絶対に成功させる」

サルヴァドは妙に張り切った顔で立ち上がり、黒マントをひらりと翻して謎めいたポーズを決めた。

「我が名はサルヴァド！ 女の心も身体も虜にする最強の淫魔！」

「……また猿だ」

「ぐっ……そのツツコミはやめろ！」

朝っぱらから大声で名乗りを上げるサルヴァドに、ミリアは呆れたようにため息をつく。

しかし、昨夜の出来事を思い出すと頬が熱を帯びた。

胸を触られそうになった感覚、熱い指先で形を確かめられそうになった柔らかさが、まだ皮膚に残っている気がする。

（だ、ダメダメ！ あんなエロ淫魔に流されたら絶対終わり！）  
必死に自分へ言い聞かせるもののサルヴァドの青い瞳はいやらしく光り、ミリアを獲物のように見据えていた。

そして一歩、また一歩と距離を詰めてくる。

「今日は本気を出す」

囁きは低く甘く、吐息が耳にかかるほど近い。

「女はな、こういう囁きと……スキンシップに弱いんだ」

その言葉と同時に大きな手がミリアの肩をなぞる。

ぞわりと背筋を走る電流。思わず肩をすくめると、その反応を楽し

むように指先は首筋を伝い落ち、胸元の布の端へ――。

「ひっ……！ や、やめろ、フラグっぽいと言わないで！」

慌てて押し返すがサルヴァドの体温はじわじわと近づき、吐息はますます熱を帯びる。

「震えてるな。……怖いんじゃない、期待してるんだろ？」

囁きとともに指は薄布の上から乳房を押し上げ、柔らかさを確かめるようになぞる。

「やつ……あつ……違う、ちがうってば……！」

声は必死に拒絶を装っているのに、胸の先端は固くなっていく。サルヴァドの口元がいやらしく吊り上がった。

「ふ……昨夜よりも素直じゃないか」

低く笑い、わぎとゆつくり布越しに乳房を持ち上げる。

親指で突起を転がすように押し潰した。

「んっ……あっ……やめ……っ」

慌てて両手で胸を覆おうとするが、その手ごと捕らえられ、背中ごと壁に押しつけられる。

「抵抗しても無駄だ。身体は、もう俺を受け入れたがっている」  
吐息が首筋を舐めるようにかかり、ゾクリと背筋が震える。

「ち、ちがうっ……これは……」

必死に否定しようとするが乳首を摘まれるたび声が漏れてしまう。

「ほら……正直に反応してる」

布をかき分けられ、固く尖った蕾を直接つままれた瞬間、

ミリアの腰が跳ねた。

「ひゃあっ……！　ダ、ダメえ……！」

涙が浮かび、顔を横にそむけても熱はこみ上げるばかり。

サルヴァドはその表情を楽しみながら、舌を首筋に這わせた。

「甘い……怯えながらも、こうやって肌を震わせる。人間の女ってのは可愛い生き物だ」

唇が鎖骨に吸いつき、強く跡を残す。

「やつ……いやあっ……！」

必死に突き飛ばそうとするが、腰を押しつけられるたびに硬さが布越しに主張してきて、逃げ場を失ってしまう。

「お前を抱きたいと、俺の身体は正直に示している」